

未来をみつめる視点

—危機に瀕して創り出されてきた グリーンインフラ—

中央大学研究開発機構 機構教授
東京大学 名誉教授
石川 幹子



ウクライナでの戦争により、多くの人命が失われ、インフラが集中的な攻撃にさらされている。アジアでは気候変動に伴う大洪水や海面上昇により、バングラデシュやメコンデルタでは、生活の基盤そのものの大地が水没の危機に瀕している。地球環境問題が顕在化する中で、21世紀のインフラの未来は、何処に向かおうとしているのだろうか。

1. グリーンインフラとは

インフラ・ストラクチャーという用語は、ラテン語の基盤を『インフラ』(infra) と、構造を意味する『ストウルクトゥーラ』(structura) を近年になり合成した言葉であると言われている。オクスフォード英語辞典第二版(1989年)では、「下部構造や基盤を構成する様ざまな要素の集合体としての用語」、ウェブスター新国際辞典第三版(2002年)では、「組織やシステムの下部を支える基盤、もしくは基本的構造」と定義されている。原点となるローマに遡れば、「人間が人間らしい生活をおくるためのモーレス・ネチェサーリエ、すなわち必要な大事業」であるとされている。

時代を経てインフラを「社会的共通資本」として、明確に定義したのが、経済学者の宇沢弘文であり、以下のように述べている。

「社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々